

弥源太入道殿御返事

文永一一年九月一七日 五三歳

別の事候まじ。憑^{たの}み奉り候上は最後はかうと思し食^{おぼ め}し候へ。河野^{かわの}辺入道殿のこひしく候に、漸^{ようや}く後れ進^{おく}らせて其のかたみと見^{まい}いらせ候はん。さるにても候へば如何が空しかるべきや。さこそ覚え候へ。

但^{ただ}し当世は我も法華經をしりたりと人毎に申し候。時に法華經の行者はあまた候。但し法華經と申す経は転子病と申す病の様に候。転子と申すは親の様な子は少なく候へども、此の病は必ず伝はり候なり。例せば犬の子は母の^{とおぼえ}吠^わを伝へ、猫の子は母の^{はたらき}用^{もち}を伝へて鼠^{ねずみ}を取る。日本国は六十六箇国島二つ、其の中に仏の御寺は一万一千三十七所、其の内に僧尼或は三千、或は一万、或は一千一百、或は十人、或は一人候へども、其の源は弘法大師・慈覚大師・智証大師、此の三大師の御弟子にて候。山の座主、東寺・御室・七大寺の^{けんぎょう}檢校、^{おんじょうじ}園城寺の^{ちようり}長吏、伊豆・箱根・日光・慈光等の寺々の^{べつとう}別当等も、皆此の三大師の^{ちやくちやく}嫡^{ちやく}々なり。此の人々は三大師の如く読むべし。其れ此の三大師、法華經と一切經との勝劣を読み候ひしには、弘法大師は法華經最第三、慈覚・智証は法華經最第二、或は^{けろん}戲論^{ひがめ}なんどこそ読み候ひしか。今又是くの如し。

但し日蓮が眼には僻^{ひがめ}目にてや候らん。法華經最第一・皆是真実と、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり。此の三大師には水火の相違にて候。其の末を受くる人々、彼の跡を継いで彼の所領田畠を我が物とせさせ給ひぬれば、何に^{あらそ}争^{まじ}はせ給ふとも三大師の僻^{ひがごと}事^{とがまぬか}ならば此の科^{とがまぬか}遁^{とがまぬか}れがたくやおはすらんと見え候へども、日蓮は怯^{こう}弱^{にやく}の者にて候へば、かく申す事をも人御用ひなし。されば今日本国の人々の、我も我も経を読むといへども申す事用ふべしとも覚え候。

是はさて置き候ひぬ。御音信も候はねば何にと思ひて候ひつるに御使ひうれしく候。御所^{へいゆ}勞^{へいゆ}の御平癒の由うれしく候、うれしく候。尚仰^{こうむ}せを蒙^{こうむ}るべく候。恐々謹言。

九月十七日

日蓮花押

弥源太入道殿御返事